

岩手医科大学歯学会第71回例会抄録

日時：平成23年2月26日（土） 午後1時より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C棟6F）

特別講演

歯内療法とマイクロスコープ「〇〇さん、じゃ、歯の根の治療しますね…」

〇野田 守

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
歯科教育学・保存修復学分野

近年、マイクロスコープは多くの歯科治療に用いられています。歯内療法も例外ではありません。当初は外科的な処置に利用されていましたが、最近は日常の根管治療において当たり前のようになっています。根管治療は、日常臨床の中で頻繁に行われる暗く地味な作業の一つです。マイクロスコープは、そんな暗く狭い根管内部での作業を、視野を明るく拡大することで髄腔内の状態を把握しやすくし、治療に一筋の明かりをもたらしてくれる力強い味方となっています。

また、感染根管処置は根管治療の中でも特に頻度の高い処置であり、治療期間が長引くことがあるものです。当然のことながら、感染根管からはいくつかの細菌が分離されます。彼らは間違いなく口腔内から歯髄腔を経由して根管内部や歯槽骨内に巣くったものです。なじみのある名前から、そんなものがそんな所にあるものまで見られることがあります。

私は本学に赴任する前は、北大病院歯科診療センターで歯内療法を主として診療に従事し、現職でも、この細い根管を通して得た細菌学的情報や拡大像から得られた情報を何とか治療に生かしたいと、日夜、「根っこ」をつついていました。

本学では、さらに教育という分野でマイクロスコープを活用していきたいと思っています。今回の講演では、歯内療法でのマイクロスコープの有効性と併せて、現在の総合歯科でのマイ

クロスコープの活用とその可能性についてご紹介させて頂き、このようなお話を通じて皆様と意見交換ができ、明日からの診療に少しでも役立つことができれば幸いです。

受賞講演 I

舌下腺に原発し超音波パワードブラ法が診断に有効だった悪性リンパ腫の一例

東海林 理

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
歯科放射線学分野

超音波診断装置（Ultrasonography:US）は、リアルタイムで無侵襲に検査ができるため、頭頸部領域では、唾液腺疾患を始めとする表在性病変、腫大リンパ節の検出などに用いられている。

Brightness(B) mode は反射波の強さを輝度変調し、CT や MRI の様に検査対象を断層像として表現する手法で、US の代名詞になっている。近年は B mode 画像上に血流をカラーマッピングできるカラー Doppler、さらに細かい血流の検出が可能なパワードブラの機能が搭載された機器が市販され、様々な臨床の場でその有用性が実証されている。本学附属病院歯科医療センター歯科放射線科でも 1996 年にカラー Doppler とパワードブラの機能をもつ超音波診断装置を導入して以来、検査件数は年間 400 件を超え、画像検査の主軸になっている。

頭頸部疾患の診断におけるパワードブラの利点の一つとして、腫瘍性病変が嚢胞であるか腫瘍であるかの鑑別ができることが挙げられる。すなわち腫瘍は血管を造成する性質があるため内部に血流の充進が認められるが、嚢胞においてはそれが見られない。その判断が病名の確定、治療方法の選択に重要になる。